渡辺淳一

風のように・忘れてばかり

講談社

渡辺淳一

のように・忘れてばかり

講談社

渡辺淳一　昭和8年10月24日、北海道に生まれる。札幌南高、札幌医大卒。整形外科医ののち、『光と影』により、直木賞を受賞する。『遠き落日』で、昭和55年、吉川英治文学賞を受賞。

主要著書には、『ひとひらの雪』『ダブル・ハート』『花埋み』『化身』『白夜』『冬の花火』『無影燈』『新釈・からだ事典』『わたしの京都』『いま脳死をどう考えるか』『恋愛学校』『うたかた』『麻酔』等々のほか、最近作に『風のように・母のたより』がある。

風のように・忘れてばかり

1994年7月25日　第1刷発行

著　者　渡辺淳一
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号一一二―〇一
電話　文芸図書第一出版部（〇三）五三九五―三五〇四
　　書籍第一販売部（〇三）五三九五―三六一二
　　書籍製作部（〇三）五三九五―三六一五
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸局文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。
定価はカバーに表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は、禁じられています。
©Junichi Watanabe 1994. Printed in Japan

ISBN 4-06-206997-0　（文1）

目次

忘れられた講師……9
鈍さという才能……14
つられ検査……19
春の雨……24
「愛人・ラマン」から……30
うっかりにうっかり……35
名前を考える……40
外科医の反省……46
小は大をかねる……51
肩こりを治す……56
高級時計で三十年……61
名人でなくなった名人……66

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一年の空白……71
白夜の国にて……76
アイスランドとクジラ……81
愛したときから苦しみがはじまる……86
ビデオの無気味さ……91
夏に河豚を食う……96
閉め忘れ……100
内臓は五千年前……105
消えた無頼……110
函館から札幌へ……115
狂児の夏は終わった……120
朝の紅顔……125

男女産み分け……131
雹とコスモス……136
忘れていたこと……142
ターニングポイント……147
瀬戸内の旅……152
天気予報の責任は……157
「間もなく……」とは、どれくらい……163
岡本綾子プロの死球……168
心にかかる、ということ……173
年賀状……178
美しすぎるシンガポール……183
外国で日本女性がレイプされるのは……188

受験と性欲……193
二つの成田離婚……198
引退したあとが長過ぎる……203
暴力団員の指……209
銀座今昔……214
意識のない人間……219
あゞしてる……224
落しもの……228
検査病……233
医者を診る医者……238
お金を貸して欲しいといわれたとき……243
戦争好き……248

装幀　三嶋典東

風のように・忘れてばかり

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

忘れられた講師

先日、埼玉県の大宮で講演をする予定があったので、出かけて行った。
時間は午後一時半から三時まで、場所は大宮の〝そごう〟と聞いていた。
聞いていた、というのは、わたしの秘書がそういってメモ用紙を渡してくれたからである。
そのおり、「新幹線でホームを降りたところに、迎えの人が待っていますから」ともいわれた。
その前、新聞連載の原稿があがらず、辛うじて一本分だけ書きあげて、慌てて電車で東京駅へ向かったのである。
このごろは朝から昼にかけて原稿を書くことが多いので、昼間の外出は仕事に影響することが大きい。とくに十二時に東京駅に着くためには、家を十一時に出なければならず、そのためには十時には仕事を終えて、髭を剃ったり、服を着替えなければならない。
もう少し遅く、せめて三時ごろからなら、もう一時間は原稿を書けたのにと、こんなときに講演を引き受けたことに、少し苛立ってもいた。

ともかく引き受けた以上、行かなければならない。
少し出かけるのが遅れたが、なんとか間に合って、東京駅で新幹線に乗り込んだ。
だがここで奇妙なことが起きた。
わたしが持っているグリーン車の座席番号の、「10番のA」に中年の男性が座り、横に夫人らしい人が座っている。不思議に思ったが、席が間違っているのではないかときいてみたが、彼等の切符もたしかに、10番のAとBになっている。
おかしな話があるものだ。
仕方なく、横の10番のC席に座り、車掌がきたので、持っていた切符を見せた。
「同じ座席の切符を、二枚売り出したんじゃないのかな」
少し文句をつけるようないい方だったが、車掌はわたしの切符をしばらく眺めてから、
「お客さん、これは明日、十五日のですよ」といった。
そんな馬鹿なことがあるものか。
改めてよく見ると、たしかに十五日の日付になっているではないか。
実はこの時点で、おかしなことに気が付くべきだった。
だがわたしは、切符を送ってよこした主催者が、日付を間違って買ったのだと、簡単に思いこんだ。
間もなく大宮に近付いたので、わたしは洗面所に行って用を足し、それから髪を整え、ネクタイの結び目などをたしかめてから電車を降りた。

だが、ホームには誰もいない。
もともと下りの東北新幹線で、大宮で降りる人はほとんどいないが、そのときも降りたのはわたし一人であった。
そのまま数分間、ホームにつっ立っていたが、迎えの人は現れそうもないので、仕方なく改札口へ向かったが、そこにも、それらしい人はいない。
おかしい……。
もしかして、出口を間違えたのか、とも思ったが、すぐ目の前に、「そごう」という大きな文字が見える。たしかあそこで講演をするはずだったと思って見上げているうちに、次第に腹が立ってきた。
「講演を頼んでおきながら、講師を忘れて迎えに出ず、おまけに切符まで間違えるなんてケシカラン」
いっそこのまま帰ろうかと思ったが、少し待てと自分にいいきかせて、まず秘書に電話をしてみた。
「ホームにも改札口にも、誰もいないけど」
秘書はそんなはずないといって、すぐ問い合わせをしてみるという。
かくして数分後に再び電話をすると、秘書が泣きそうな声で、「ごめんなさい。講演は明日でした」というではないか。
「ばかだなあ……」

彼女は関西出身で、関西の人に「ばかやろう」はきつい言葉だときいてはいたが、そんなことまで考える余裕はない。

こういうときにかぎって、講演をしたくなるが、誰もいない場所で一人で喋っても無駄である。仕方なくいま来た道を再び東京へ引き返し、渋谷の仕事場へ着くと午後四時。

十一時から四時まで、結局、五時間、用事もない所を往復したことになる。

いささか疲れて仕事場へ戻ったが、といってすぐ原稿を書けるというものではない。ウォーミングアップというか、気持ちが充実してくるまで、最低一時間はかかるし、疲れた分も含めると七、八時間のロスということになる。

あとで秘書に聞いたところでは、初めの依頼のファックスには、「四月十四日水曜日」と書いてあったらしく、ファックスを見せてくれる。たしかにそのとおり日付は合っているが曜日が違う。

このあと仲介に入ったエージェントでは、「十五日水曜日」というファックスも流したらしいが、秘書のほうは初めに十四日と自分の手帳に書きこんだので、そのまま十四日と思いこんでいたらしい。

しかもわたしが出かける前日に、秘書とエージェントとのあいだで、「ホームでお待ちしていますから」「よろしくお願いします」と、電話でやりとりしておきながら、互いにわかっているつもりで、日付の確認をしなかったらしい。

おかげで、わたしは翌日また、予定を急遽変更して、大宮まで行く破目となった。
なんたる頓馬、なんたる馬鹿さ加減。
かくして講演で開口一番、
「実は昨日も来まして、昨日は体調もよくて、いい話をできそうだったのですが、聴いてくれる人がいなくて……今日は二度目なので自信がありません」
というと、みなが爆笑。
「間違いないと思いながらも、いま一度たしかめること、これが人生では大切です」
即席の教訓を垂れて、少し気持ちがおさまったが、そそっかしいことでは、わたしも人後に落ちない。

鈍さという才能

一般に、才能というと、頭がよくてシャープで、鋭敏なものを想像するが、必ずしもそうしたものにかぎったものでもない。

それよりむしろ、鈍いものも貴重で、それはそれなりに才能である。

たとえば、叱られてもあまりこたえないとか、皮肉をいわれてもさほど通じないといった、いわゆる鈍重というべきものも、才能のように思えてきた。

まあ、そうはいっても、人並みはずれて鈍重なのも困るが、ほどほどに鈍いことは、むしろ必要ではないか。

最近の若い人は、家や学校であまり叱られないせいか、会社に勤めて上司などに一寸、叱言をいわれただけで、たちまち落ち込む人がいるようだが、そういうとき、あまりこたえない人間は貴重である。

たとえば会社で重大なミスを犯して、部長か課長に激しく怒鳴られ、「あんなに叱られては、あの人は明日、きっと休むわよ」と、噂していると、翌日、元気いっぱい出てきて、「おはよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com